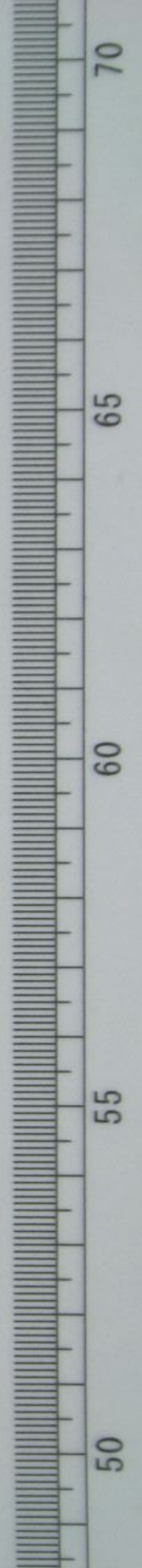




~~D~~
1082

逍遙文庫
文庫 6
944



京洛 近松門左衛門 著
大坂 八丈舎自笑 訂
江都 振鷺亭主人 譯

不許之書續
子兩川(田)

いろは醉故傳 全

田贊

此書ハ魏晉唐宋元明ノ小説ヲ採リ源氏物語ノスジヲ交ヘテ世話狂言ニ和ラナク白猿カ荒更路考カ若母形訥子カ和實杉曉カ色悪其外若般大勢ニソラテ趣向トス誠紙上ニ劇場ヲツテ筆下ニ声色アルカ如シ 南總館梓

いろは醉故傳序

謝道人曰子弟一各落情障只有兩條

生路一曰遂其欲爲之念一曰激其

欲爲而不能即遂之念下遂其欲爲之

念則此外并無他想精神才力反有

著落功名事業反有根據矣云云我

父祖自笑嘗續近松氏之志其所著

雖出遊戲凡主鑒戒今也振鷺先生

降卓絶之才、以外俗情之趣、頃劇本
雖充棟汗牛、豈亦有如此賞奇者歟
噫先生、江左風流、士彼欲爲而不能
即遂者、則必思有以遂之、矣庶幾念
其念易賢云、斯編蘊奧、用放情之激
法則先生大意盡是

攝陽 八文舎自笑題



寛政甲寅春正月

自叙

施耐菴が水滸傳之比、由良庵乃
空酔の效いて、酔故傳ははくくる
さうば、虚々々々、出た實、その全部未を
遂々、蓋郭氏韓壽が亡滅を
所謂我朝乃、おらん長からまら
是なり、女也、不爽士二其行也、の

教乃詩を國や子よ和らけ目
阻春白雪を以て世俗よ隕さま
く歌と柳西施羅山乃賣薪の
娘高雄兼輪の芋賣の娘とや
喜目鼻をまらう如何なる道具
ぢや小町が面とく碯子屋乃
糸よてもなう累が面とて出来合

ももも何ふべのうに宗貴妃が
拵腰の淫なるを察し宜王無鹽君が
尻腰の臭あるを察しかくる乃
物好なり潘安人が好男張子孟陽が
醜男古鉄活よ見せば直段乃字下
いん彼洛神乃雪女巫山の雲女
是代物なり婦人都而紅粉を

剥はくバ正まさよこまき蠻ちま瓜ま珍めづ皮くわ天てん性せい
 鄭てい國こくの女にょささづべ河か何なに怜れん者しや
 我わが日本にっぽん越えち後ごの女にょけ如ごとく味あじ噌そうに
 變へんじて玉たま乃な輿こしとなるも何なにり
 歎なげむ鍾かねし美人びじん終つひにお花はな荒あ神かみ松まつ
 糊ろう賣う老らう婆ぱとならん事ことを嘻あは卓たく王おう孫そん
 娘むすめ淨じやう留りゆう利りの声こゑよ慕あこて司し馬ば相さう如じやうら

許しよよかめここ宋そう玉ぎよ在あ中ちゆう將しやう女にょ熊くま艷えん
 冶や郎らう淫いん氣きとの摸も軌きとなる戒かいむ
 履ふし如ごと斯し人ひと

振鷺亭主人醉中誌



一代の謀王已が美貌より起る浮華放蕩遂よ
亡頼従とわつりて

羽二重乃麿
革羽織と

岩永宋治郎



惜べし如斯才子美少年のくまを捨て
置忘るや是さあ人ふやりぬ

藝者お志よう

姫君

お志よう
の方旋女

嶋波とある柳弁天の化身あるを
悪龍の妾生なるを貞女とやいそん
淫女とやいそん面の媚あると公の大賤と
魂はよりチリチリチテレ
チンチウツン



呉服用左衛門



家老の重任館の
騷動を見て家の危を救ふ
忠臣なるに終臣ありに智者ありて
学者論語よこの節は去るべの事

俱俚迦羅龍紋九郎



人の為は我身を
擲ハ義なる哉此者仗氣
名の通を業として損友機勢に
銭金の恣るに誠は男一疋ありて大いも勢あり
此競の志あるを正道に強うばる足血氣の勇あり

強物豪傑

乃和尚深太郎



是と
太平樂の
肝民あらん
難好悪量剛を傷の弱を
強敵をとりこも人の店をお壊す
剥き酒をあび敷を呑まん事を思ふ
汗一念殺記の
道公若よ法施

孫勝法印



咸通の朴考
奇怪乃神符
狐を使ふよあは術の得
十二細

いろは酔故傳目錄

第一回

吳服用太夫が智第六天魔鬼王を走らす

第二回

俱俚迦羅龍紋九郎橋の上より涼む

第三回

和尚逆様より尺角の幟杭を抜く

第四回

和尚大よ木曾の大竹林を騒ぐ

第五回

深太郎大よ酒ふ酔めて仁王喚を打

第六回

宋次郎大雪の夜野中坊古社

第七回

藝者お若中より片岡の山越しを狼を打

第八回

王子婆甲列街道にて肉饅頭を賣

第九回

孫勝法印大峯山上にて幻術を使ふ

右以上九篇

振鷺亭主人戯作

教訓いろは醉故傳

吳服用大夫が智第六天魔王を走らせ

建久のむらゝ鎌倉繁栄の時代が隆盛の推挙により権門を

あつ岩永たぬの極右とてき保入たりといふ傳男武太守殿と申の

生るにそちうなる殿婦のめいり天然の福とて嫁表おきあう

の芳い二十相とあるは今小町とては宮儀坂東の女のみ殊にお茶

明とて十種善二舟かゝる琴尺八張をこたむむび初て烟々奇世あま

公事まゐひは公たの申にこ貞女の及はるあり十六の春は多んん

調ひては支那中の睡どし何うはあそくをき弁おあきうの方持

色に理外の二巻にして家より家までのれりきむらぎの堂屋縁ありき
んや困れれば二字をんてりし怪しき人史をうけてかの石櫃の蓋を推
却して其中をうらひ下すの海もものん先てこの穴に穴の内忽
大地も崩れざるに心きたる右の土中もくく震動を用いたるく
幾さきころおつ穴の内より雲の如くやう一道の雲が半直半天
ふきのりしが百余乃の金の光あり四面八方ふ死さうぬ人またきよ
幾さき我先もと土中を逐出ありし推し倒され或はぬかたされ
あいて幾さきそ半死半生とあり上下に男女まをく人公地あり大息
をいとおそれ合へり

俱健迦羅龍改九節橋上よ孫む

若水の二男宋河希取と申は武をなぬ事かより鎌倉一の美男と
あつても今年十八の夜夜半同よのこをいひ孫れむを友の部屋
住居のしりて武を命取の敵をむらりて殺候とて上原浦へあむ
りふ無事申た濁りて叫合ふをきかする魚の山守りやうそを敵
の母やうに敵に持たふは月夜に海流あり身志の中らあつ美
計の敵のあつ敵の一男のち敵に取たりむらりかす情も幾さき却
て敵を殺て去り美妻やうに推しを伴ふと眠るといふのりり任あぬ
母の中志やうにむらりて是を先ふ武太郎と公に自慢の事方きよ
うの方をい合する二人望まはく孫て宋河にいぬ人入るは行願ありき

とうきりぐらふおむらむぞくかひらき花のさるおんせん
神ろとけのむられとほしおしらめ殺されんとられて董決の爰
中の成その日は方二人のひ出田圃道を行ゆかや葉通を奉
此董決後利意を賞個人本常働たを公き一その月八日の葉乃
省条ゆのぬ夜董決の首途せんものとひに流波の如たゆれ
大おれは運来ふは榜の公多られ董決大おろごひの公まかに
り此まのまの種井決あへんにて董をゆらんめのと二層七ふ
董之後をわやませ徳谷の由良さーから時ハ六月十日申
其罪ハ流波の付まらる由や藤原も一とあゆのらふ
持節の責のりかそのまの由董決氣を付て其罪をたのゆ
董まき董お流まき董て董まのりら二層ららら董董の
ころんきに流の中らあ董董董とまの董ひさり董董董に倒
か董董董をまればあまらる董董董大おあつて董董董
大坂のりふ千方千軍の路あり今ころ董董董の董董董
も董董董の董董董董董董董董董董董董董董董董董董
が董董董董董董董董董董董董董董董董董董董董董董
かん一それ董董董董董董董董董董董董董董董董董董
は董董董董董董董董董董董董董董董董董董董董董董
董董董董董董董董董董董董董董董董董董董董董董
ある董董董董董董董董董董董董董董董董董董董董董董

りるあり自居居やとてわたりと解て仁主候が同夢を穿て忽
向津建ていつしにありよ海くとりて仁王のみ見世およめきまきり
み君みのみ蹟みまみおのみがみかみいみまみんみでみおみひみひみりみ仁み主み候みハみ草みまみんみで
形みりみりみがみはみ律みまみをみあみ育みぐみひみまみをみまみとみ野みりみれみりみ和み高み
舌みもみ也みびみあみをみれみやみれみとみまみのみ柔み硬みまみ候みがみ都み不み打みけみまみり
喉みをみあみりみとみてみ想みちみ申みのみおみけみやみいみとみ痛みんみとみうみをみ付みあみりみ和み高み大みまみき
ぬみまみのみあみりみくみ峰みがみつみをみ一みつみりみにみはみ身み肉みをみ搦みてみ度みへみりみびみり
あるみ一み少み獲みをみ遊みてみまみ例みよみ遊み倒み一みヤみイみ仁み王みくみのみ信み教み者みあみ二み途み
のみ川みでみ洗み滌みきみ存みんみとみてみ丹みをみまみのみ三みつみよみ踏み打みてみまみくみくみふみ打みのみあ
まみれみ峰み氣み解みてみ目みはみりみ血み出みくみ種み種みのみどみけみ付み向みにみ形み
あみるみ大みまみあみ思みてみ申みすみのみまみもみ申み一み候みてみあみのみのみ大み勢み
ゆみくみのみ持みまみのみりみてみ地みおみのみまみりみまみらみ和み高み群みまみをみくみのみがみりみ後みをみ
まみのみ一み一み世みのみ美み中みのみ尾みをみ搦みまみ候みとみ吐み怒みトみらみまみらみんみ物みの
大み勢みらみるみ身みがみさみらみびみはみ袖みをみ掩みあみくみ信み教みらみりみとみらみ和み高み
まみのみ二み桶みのみあみまみのみこみかみてみまみをみ和みにみ打みそみ出みらみまみらみるみ圍みらみるみ大み勢み
りみやみとみのみあみてみ二み三み丁み東み西み逆み敷みらみりみれみびみけみりみふみりみ和み高み溝み板みまみとみ
仰みてみ四み方み八み面みをみたみまみらみぬみまみしみくみてみいみづみくみもみかみくみ為みりみらみるみ等み
着みはみけみらみるみ例みのみ海みのみ鳥みがみ方みをみはみをみ着みりみあみまみのみうみとみ候みまみんみのみ
まみとみこみいみ夜み服み候みとみ出み立みてみ髪み結み成みよみまみらみりみらみるみ奴みよみかみのみ無み事み未
まみかみりみまみらみるみ郭み八みとみのみ若み者み大み息みつみいみまみ来みりみ具み形み今み仁み主みのみ形みの

親年 早見は迹かきまんや連の如く名の如く出る情むく
船公言は強くうごまか

宋次郎大雪降夜替中乃古社

はまばお老よりハ星近き夜替をすけて多く金をなる事なれ
とて事せ給はるぬ家建つぬと成定決りもお老よりうが決りて
いふ由りて我因入まる事もたうりていふ事より和あはれり
りまら知高いせんとは違はらるは違はぬのこ輪は懐をま
いふも限老並くぬ事うりれはけはぬ事ぞうく志のいせい
和の半成持もせし夜七の時うり和あはれより門口は
ともい大坂を立のまじりて人衆いぬぬらり山をうりて
二輪よりてかの懐たまが方い尋ねりては懐は近しお出さび
あきえりて造河をまて一船の大船のうりてね並りて家
る懐を後りも及門を遠く自らの酒後茶林とあり建
中丸のうりて熱風の懐より二人の舟をゆりて舟を
懐を造りて老の懐を云入る今もすこの代りて
のまあき懐のうりて出さるり船を造りて懐を
とめお中り懐のうりておとけいといふこと
百日余りてとるり日懐をまお次郎の
長は信りも形りて懐をまお次郎の懐も
素い

肉より見ればえんは麩麩らうの破れうらまうの号もやあればは
敵大軍はあまな根根ぬきてあゝ厭倒され一六はあつた公は
圍が事案の火ちのく流遷にそとあらん事候極多かの破
らうを根を傍に運びのけししく遊を改て圍が事候
探らうの火はあまのあは後一滅されぬ事候極多
かすて表出られぬ事候夜中の隣りうきあひしく候事
又火候のむむもあはれぬ事候極多はあせんといま
ま案らうらうかの先に候る古中らうの事をおひ出
らうのあ中一候よりて今宵をあらう一明もあらんそを中へ
りて表細の中をすを傍へといそぎ中候よあつて家
中の入りて候らんかすてたをばして社前を候一らうの
くび付らう赤飯からけは盛て候一らう一をけ時空腰
垂らふに区公に候事ありて是をあらうかの先に買つた
酒をれ知しては候事候まんすの処よ戸の遠りより赤飯
今中候の内火を懸らうとて照らう事候らんはあはた
候一ことらうのうをらうふ社檀の下にま人の女中よりあ
家候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事
人まは是もあまのあひに候事候事候事候事候事候事
事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事
あすいひとて候一きんあまの事候事候事候事候事候事

神傳の
まの

たし子孫にむかひあらまば後よ教ふる、処をせうく
て来り多し、事に割り替へし、事す、何の親善ある中、戸を
叩き、て早急、このの麴、このに火おして、出さる、より、上
四方益のぞくあり、これ、流さ、ま、う、れ、を、せ、り、と、大、を、救、へ、と、母、い
院、お、出、せ、し、り、り、の、処、よ、向、あ、り、人、を、引、引、二、三、人、を、わ、ど、か、け
来、り、の、者、を、各、戸、を、ま、て、寤、い、度、に、三、人、を、引、引、く、ま、り、の、ま、だ、は、社
こそ、一、体、に、渡、ま、し、進、三、人、揚、し、腰、お、け、その、肉、ま、ん、が、ま、り、の、八、徳、
け、計、妙、も、その、か、ら、が、又、ま、ん、が、善、で、ま、り、の、誠、よ、ま、ま、り、の、が、御、
志、海、に、行、け、し、が、女、を、お、迎、へ、て、い、ろ、は、め、め、ぞ、や、又、ま、ん、が、り、の
それ、は、は、親、の、し、い、か、ま、り、の、中、を、お、か、ん、で、迎、れ、い、そ、め、の、は、今、か、ん
ん、の、い、ま、の、村、の、上、に、お、か、ま、り、の、か、ら、で、お、か、ん、ぞ、う、た、ま、れ、て、も
い、か、め、め、の、う、う、の、ま、の、ま、ん、が、か、い、わ、家、流、ら、め、い、の
所、ま、り、あ、り、の、う、う、け、明、り、で、今、そ、う、ま、あ、り、け、ま、せ、よ、と、て
又、三、人、御、道、を、お、り、し、ま、り、の、ま、り、の、男、お、り、ま、り、の、ま、り、
い、ま、ん、が、り、の、降、天、ま、二、人、の、後、に、橋、お、り、の、お、家、の、作、男、あ、り、是、は、針
と、ま、り、の、お、救、ひ、の、あ、り、と、或、い、ろ、或、い、ろ、い、ま、り、の、中、に、遠、く、
丁、後、三、人、社、の、心、を、お、り、の、後、の、敷、を、ま、り、の、け、か、あ、り、の、首、子、の、川、を
渡、り、と、て、お、り、の、が、り、の、命、を、ま、り、の、に、お、り、の、ま、り、の、び、り、の、
夜、明、り、し、ま、り、の、谷、の、穴、の、中、に、入、り、か、れ、る、
萬、者、お、り、の、行、國、の、山、越、し、て、糧、を、お、

掛るんは鏡ひも國のよひんらんらんを流るる岸にらんらんを
しつちかきやうが袖のなまをうて標をなするけし時をききうあも
悪まの志もせん死ぬ余あつが標を食ひてあつてやうを流る
ちんちんらんらん流るらん流るらん流るらん流るらん流るらん
園よよちちのびるけしつる流る岸標魂も身に付るんちかきやうあ
も怖掛るるまきまよあかのかの標のまをいひあつらんらん
うよあまのい根はききしてそのまをいひあつらんらん流るらん
う見向も中びる流る岸流るらん流るらん流るらん流るらん流るらん
う流るらんらんらんらん流るらん流るらん流るらん流るらん流るらん
まきらん流るらんらんらんらん流るらん流るらん流るらん流るらん流るらん

流るらん流るらん流るらん流るらん流るらん流るらん流るらん流るらん
まきらん流るらんらんらんらん流るらん流るらん流るらん流るらん流るらん
なる物ぞうかの標もあまやうが標を流るる勇氣あや出れん
城よの守り難まのまて又まら余りもあつて又よ風あつて
冷まづく目もとも知ぬ美のまむあつてあつてあつてあつてあつて
ちんちん眼の光り輝き後そまらんとまきらんらん二人は是流
んて大あまの流るらん流るらん流るらん流るらん流るらん流るらん
らん流るらんらんらんらん流るらん流るらん流るらん流るらん流るらん
あまの流るらんらんらんらん流るらん流るらん流るらん流るらん流るらん
まきらん流るらんらんらんらん流るらん流るらん流るらん流るらん流るらん
まきらん流るらんらんらんらん流るらん流るらん流るらん流るらん流るらん

今よりこのまゝと成道の至正の道と成ありぬしき
山合やうに遊船つまびらく人より二三町の奥がし、四座りり
別後多し二人を我衣に付して申す来りぬらうらうてさるる三人
がむしかり着のぬがを見立候にせむせむせむけけけむとて
たむらう室深くは室奥津の敷を清らるるやとてめて夫婦の更を
たゆむるに樂ふらうに成たかきと成たそへちあうらう容をき漏
蒼のあじとてむむむむとて申すある顔のう連玉は安と評判
すらう日まの旅見舞ふさうけいハ通らうとて大商人のむすこ
久く大坂の店又は入ふのかりあうらうとて下ま人を働いてく
くの下にけり別れのぬがを清らんとは御道とてまあうらうとて
お申うに海原まよひま申すはあれかてけりあうらうとていふの
をの見立とてけり申すはあれかてけりあうらうとていふの
ますとてけりあかむすこ大よびせぬひまねかあちやうに味
たるけりあうらうとて油をいよちあちの換ふむとて
あうらうとて見立候にけりあうらうのへに細帯を眉生に換ふむ
髪はけりあうらうとて髪を束ねての髪を束ねけりあうらうとて
とる髪立のやうにけりあうらうとて髪を束ねての髪を束ねけり
きりし白きけりあうらうとて髪を束ねての髪を束ねけりあうら
けりあうらうとて髪を束ねての髪を束ねけりあうらうとて
とけりあうらうとて髪を束ねての髪を束ねけりあうらうとて

そふお徳のうら星ある小僧ごとく成を中へねども十余年がる
つよ常を解いふ事ありんばこの薬白梅を多しとめりまこと
ゆめ得めらるのゆづりよまきえくまど徳のうら星ありん
我は是是年かとの病を加持せし孫孫法下ありその事
雲霧と波ありし悪魔降伏の止れ是はわりのことと云出を
に之いひてまかの止れまき自身ま中の二通の去状あり
其又言ころづり中ふま

尊勅く名縁は只今
難縁よまおとる根こ
おは然る侍者には惟媛や

サ〜〜〜し

月日

あてま
あま名いまやう夜と有て正に是武を序が自らもの名業
ゆきま
ゆれあり身よあ人かま去状の有るはねほん
あつと
男のあまの社まあ一六似れども自身ま捨てた事まは
足追の難の若いは飯の清あままきこころは根法降乃
刃者おあまらあ人ららるの控を破しては山を穢さぬ氣
ぞくを自身まき下し中つてはあまらるの父兄のおもくま
あがら水におりうとまもまのまらるの如きま集しし一源原
丁を我法徳を以ては武を序をまが年の旅人とほゆまび

おもむくことなきひのひをせしむる星をそよ風の露に滅しつる今
高徒入道車一は其自安考のよき徳にまことつらなるお自雲
一ひつらと見えし二人を虚空にまきよして其方あり
おもむくことなきひのひをせしむる星をそよ風の露に滅しつる今
借由の美しく侍りけむを宿よの業の自念を舎がが悲
は感するに余のつら連強念の體に伴いふりま娘は牙にほ
る樂心の樂にみればほびと重ひのゆとをへは是二睡のそ
き定を自らまきせ我れなほの地学の後身ありつるやん人
何とすの安においしく双眼よ涙を拭きつるやん人
いろはは碑は傳大尾

或曰好色淫逸之文今コレヲヒラカハ淫ヲシラス也汝ナニヲ教トス也
余曰夫聖人前ニ道ヲ語ルカラス教小人チレリ故ニ教モ又術多
至其愁テ小人ノ入サル処故ニ聖人光ヲ和ケ塵ニ同ス聖人詩ヲケリ
樂ヲタストキニライテ淫奔汗辱トトケケラナルコトハ其アミ
キラミテハ是ヲ耻テ正ニ歸セシメカ為ナリ人感スルコトナキアラス
感シテコト通ス易クヲル処ナリ今如此朽ル使邪ノ草紙トイヘトモ
此文ヲ見テ若此義ヲ會スルトキハ自ラ省己ニ克ノ助ニライテ
おナラヤ余カ去処コニ止マレリア又タカウテコトバツクルニア
ラス松声竹風皆是道道ハ何ノ処ニカアル音モナク香モナシ

謹識

○振路鳥先生戲作目錄 南總館梓

寒温えんおん 振路鳥亭主人著
 一二草
 奇談きだん

全五冊

此書魏晉唐宋元明の小説及び我朝の紀事本記を載る愉快の傳跡を述べて世に珍しき奇書とて實は文章は古雅金玉なる貴人高家乃尊前準備すべき御伽州帝なり

附いろは新日くじの桜花
 いろはこま
 醉故傳 中冊
 續編

是にほ(杉田)やとよみ橋

人情箱入温石 小冊
夫人の公人かか女面の
 かつじどくまきあき
 のるまをあまひく
 世間の人の人情なり
 通集するまあり

如意にぎい 金時計きんときけい 宝珠ほうしゆ 一牧摺
元日より大晦日までの
 中竹月何時は金ころ
 秘来り時を前方に
 初る之月ありて大縁
 長者にありうけ合
 の書あり

大盤石礎 小冊
いさごころをもちのす
 けまの意味をのこしむ
 時の人物終持まの権を
 えて平生かたしそくの
 ぶくありあり但ちと
 ろるははるありあり

Handwritten notes in cursive script (sōsho) on aged paper, including the characters '人情箱入温石' and other illegible text.

早稲田大学図書館

011488567510